



## 世界自然遺産登録から30年

雨上がりの森林で、もえぎ色をしたスタジイの花がみずみずしい芳香を放つ。屋久島(鹿児島県屋久島町)の西海岸を走る県道「西部林道」沿いに

は、手つかずの照葉樹林が広がる。木立の下に立つと、光のシャワーのような木漏れ日に包まれた。屋久島は鹿児島・大隅半島の南端から約60kmに位

置する円形の島だ。島の約21%にあたる1万747畝が1993年12月、白神山(青森、秋田県)とともに、日本初の世界自然遺産として登録された。

きょうはみどりの日



# 新毎日

# 共生支える 悠久の屋久島



照葉樹の森で毛繕いするヤクシカ。近くには熊を探すヤクシカの姿があった。鹿児島県屋久島町で4月、宮坂裕樹撮影

西部林道沿いには、約20kmにわたって人家のないエリアがある。野生動物の格好のすみかだ。ウコギ科の樹木ハリギリが青々とした葉を茂らせている。亜熱帯に分布するガジュマル、アコウの幹から伸びた気根が岩や木々に絡みつき、ジャングルのような雰囲気を感じさせている。

「ロー」「キュー」。林道から森の中に入り、息を潜めて歩を進めると、鳥のような細かい鳴き声が聞こえた。音のする方を見ると、黒いアーモンド形の瞳と目が合った。屋久島に生息するニホンシカの亜種「ヤクシカ」だ。亜種の中でも特に小型で、胸長短足。出合ったのは大型天ほどのサイズの雌だった。

間合いを計りながら近づくと、ヤクシカは警戒したり、驚いて逃げたりするそぶりも見せず、悠々と歩いている若葉をはんでいた。やがて雌がもう1頭現れ、2頭は互いの顔や体をこすり合ったりしながら、約10分近くじつじつと見つめた。

同じ森には、屋久島固有のニホンザルの亜種「ヤクシマサル(ヤクザル)」も生息する。木の上でヤクザルが新芽や木の葉を食べ、ヤクシカはその下で餌のおこぼれにあずかっていたりする。地上にいるときは互いに毛繕いし合うこともある。この森では、両者が共存しながら暮らす姿を観察することができる。

島の人口は現在、約1万1000人。「屋久島は『人2万、シカ2万、サル2万』と言われていました。人間とシカ、サルが共存してきた島だったのです」。そう話すのは町公認ガイドの市川聡さん(62)。環境庁(現・環境省)の元国立公園管理官で、30年前に島に移住し、野生動物の生態を見続けてきた。

ヤクシカの特徴的な姿から、島の自然の移り変わりをうかがい知ることができるといふ。

### 環境適応シカ小型化

屋久島にはトラやオオカミなど、シカを捕食する動物がおらず、天敵不在の島内でシカの個体数は増えていった。やがて餌となる植物が枯渇したことから環境に適応し、餌が少なくなるとむすむすに小型化が進んだと考えられる。屋久島に限らず、大陸から離れた島しょ部では、大型動物が小型化するという独自の進化を遂げることが知られている。

「屋久杉」と呼ばれる樹齢1000年以上の天然スギの美しさなどが評価され、屋久島が世界自然遺産として登録されて30年。「今見ているのは長い時間をかけて育まれ、後世につなげていく自然のほんの一部なんです」。市川さんはそう語った。【田中韻】